白山ふるさと文学賞

第十二回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

中高校生　小説の部　優秀賞

「藍色」

美川中学校二年　藤沢（ふじさわ）　帆乃（ほの）

誰もいない学校の裏にあるよごれた公園。私はそこが好きだった。
気づいたら彼女はそこにいて
「何か、困ってる？」
手をさしだした。

私は普通の中学生だ。どこにでもいるただの中学生。友達は多くはないがいる…と信じている。ただ、一つだけ普通じゃないことがある。
「そういうのウザいから!!さっさとどいてくんない!?」
それは、クラスでいじめがあることだ。いや、いじめはけっこう中学生では普通のことかもしれない。いじめはおしゃれな女子グループの数人で行っている。他のクラスのみんなはいじめられている子と仲が良いわけでもないので見て見ぬふり。もちろん私もその1人。今日も叫ぶ声と笑う声が飛びあって1日が過ぎてゆく。
放課後、学校の裏にある公園のベンチに座り目をとじる。乾いた風が私に自然の香りをとどけてくれる。聴こえるのは小さな泉の水の音。昨日見つけたこの場所は私の心を落ちつかせてくれた。強い風が吹く。思わず目をひらいた私は目を丸くした。
「君の名前は？」
女の子が立っていたのだ。全く気づかなかったしここに人なんて来ないと思っていたのに。同い年ぐらいだろうか。こしまでのびた黒い髪をなびかせながら笑うその目は、青色だった。
「ねぇ、君の名前。教えてよ。」
「えっあっえ～っと…。あっ藍です。星河藍。…えっとあなたは？」
「私？私はヤツキ。よろしくね。藍ちゃん。」
初対面なのにすごく親しげだ。でも、嫌な感じはしない。
「藍ちゃん何か困り事？」
「え？」
急に何を言うのだこの子は。私が訝しんでいることに気づいたのかヤツキさんは慌ててこう言った。
「あっごめんね。変な意味はなくって。ただ、藍ちゃんが浮かない顔してるなぁって。」
首をかしげこっちを見る姿は、同性である私でもドキドキさせられるぐらいに可愛かった。
「浮かない顔…。」
私はそんな顔をしていたのか。どうしてそんな顔になっていたのか、思い当たる節は1つだけあった。
「実は、クラスでいじめがあって。私がいじめられてるわけではないですけど、クラスの雰囲気すごく悪いんです。それが嫌で。」
「なるほどね…。藍ちゃんは、いじめをうけている子がどんな子か知ってる？」
「よく知りません。」
言われてみれば確かに、どんな子なんだろう。
「その子のことを知って仲良くできたら、いじめも自然と無くなるんじゃないかな」
「でも、それでよけいに悪化するかも…。」
「あぁ…。…ごめん、言い方を変える。」
ヤツキさんは軽く息を吐くと、こう言った。
「その子を救ってあげて。」
空気が変わった。その瞬間周りにある全てのものがヤツキさんに惹きつけられたようなそんな感覚だ。訴えるような目は、儚くて、悲しい色をしていた。
「話しかけられるだけで、光が見えたりするんだよ。」
そう残してヤツキさんは公園を後にした。

次の日、教室はいつもと同じ光景だ。いじめられている子、如月咲雲さんは教室の隅で1人、窓の外を眺めているようだった。ふだんい

じめている人達は近くにいない。話しかけるならきっと今だろう。
「あっあの…、如月さん。」
　如月さんは話しかけられたことに気がつくと、目を丸くしてこちらを見た。
「どうしたの…ですか？」
「あっえっとね…。」
　どうしよう。話の内容を1つも考えていない。私があたふたしていると如月さんが
「あの…どうして私なんかに話しかけてくれたんですか？」
　と聞いてきた。
「いや、特別な意味とかは無いんだけど。ただ如月さんのこと知りたいな…って。」
　如月さんの表情が明るくなった気がした。
「あと、タメ口でいいよ。私のことは藍って呼んでね。よろしく。」
「あっわたしのことも咲雲でいいよ。よろしくね藍ちゃん。」
　咲雲は少しおどおどしながらそう言うと微笑んで
「ありがとう。」
　そう言ったのだった。でも何故か、私には咲雲が心から笑えているようには見えなかった。予鈴が鳴ったため話はそこで終わった。
「おせっかい…とでも思われたのかな…？」
　そうつぶやくが返してくれる人は誰もいなかった。

　放課後、公園に行くとヤツキさんはベンチに座っていた。私に気づくと
「どうだった？」
　と話しかけてきた。
「話しかけることはできたんですけど…。」
　私は今日の出来事を全てヤツキさんに話した。
「それで、藍ちゃんはどうしたい？」
　どう…したい、か。頭には咲雲のいつもの何かを諦めたような顔がよぎっていた。
「笑わせたいです。」
　その言葉は自然と出てきた。
「たとえおせっかいだ、1人にさせてほしい、と思われても咲雲の心から笑う顔が見てみたい。心から笑ってほしい。そう、思いました。」
「そうだね、いいと思うよ。」

　それから1週間、私は毎日咲雲に話しかけた。いじめている子達に何度か悪口を言われたけど、私には友達もいるし、咲雲と比べたらこれぐらいで諦めるわけにはいかない、そう思った。咲雲の表情は日に日に明るくなっていき、話しかける人も増えていった。毎日公園にも行って、ヤツキさんにその日のことを報告すると、ヤツキさんも嬉しそうにしてくれる。
「私の好きな色は青…かな。海とか空と見てると落ち着くんだよね。」
「わかる！私も青が好き。」
　咲雲がだんだん自分のことを話すようになってきてとても嬉しかった。
　今日もヤツキさんに会いに行き咲雲のことを話した。
「もうちょっとで藍ちゃんの目標、達成できそうだね。」
「はい！」
　ヤツキさんと出会ってから毎日がいつもより楽しく感じられるようになった。
「そういえば…私ヤツキさんについて何も知らないです。ヤツキさんについて、教えてください…！」
「私について？いいけど…面白いものじゃないよ？」
「全然いいです！聞かせてください。」

「そうだね…。名前は神崎夜月。藍ちゃんと同じ学校に通ってた。あとは…誕生日は9月22日。これぐらいでいい？」
「ありがとうございます。」
私と同じ学校に行ってたのか。
「じゃあ私の先輩ですね。今は高校生ですか？」
「うん。まぁ…そんな感じ。」
…？自分のことはあまり話したくないのかな？今度からはもう聞かないようにしよう。

「ねぇ咲雲、今度一緒に本屋さん行かない？好きな小説の新刊が出たって言ってたよね？私も漫画の新刊出たから買いたいんだ。」
「えっいいけど…なんで私なんかと一緒に？」
「私なんか…って、咲雲だから誘うんだよ。」
「私だから？」
「うん!!」
昼休みの教室、虹がかかった空。まぶしいくらいのその景色を後ろにした咲雲は一言、こう言った。
「ありがとう。」
笑った。咲雲ってこんな顔で笑うんだ。前のぎこちなかった笑顔とは違う。心の底からの笑顔だ。
「こちらこそ、ありがとう。」
他人だったら日常であるこの出来事は、私にとっては今1番求めていたものだった。これも全て夜月さんのおかげだ。夜月さんがいなければ、この感情も知らなかっただろう。そのとき、私の近くで誰かが「ありがとう。」そう囁いたような気がした。

その日の放課後、公園には誰も来なかった。別に約束しているわけでも無いしその日は特に気にしなかったが、それから1ヶ月、夜月さんは公園に来なかった。今では咲雲とは親友と呼べるほど仲良くなっている。夜月さんにお礼を言いたいという気持ちも日に日に増していった。そういえば夜月さんは私と同じ中学に通っていると言っていたはずだ。7年前からこの学校にいるという担任に聞けば、何かわかるかもしれない。
「あの…先生、ちょっといいですか。」
「どうしました。」
緊張する…。そもそも先生は夜月さんのことを知らないかもしれないし、やはり話しかけないほうがよかっただろうか。いや、今さら後戻りはできない。
「神崎夜月さんって知ってますか？たぶんここの卒業生なんですけど…。」
「夜月さん…!?」
「あっはい。その人に会いたいんですけど会えますかね…。」
「会えない…です。」
え？何故だろう。やはり卒業生の情報なんて無いのだろうか。
「あなたの言う夜月さんと私の言う夜月さんは別人かもしれませんが、夜月さんは5年前、亡くなりました。」
「えっ…!?」
亡くなったって、私は1ヵ月前まで会っていたというのに。
「いじめられて…自殺、らしいです。近くの公園の泉で。」
そんな…。先生の言っている夜月さんとあの夜月さんは違うかもしれない。でも、どこかで納得している自分もいる。放課後になってすぐ公園に行く。泉をじっと見つめていると、後ろから声がした。
「あーあ、バレちゃったか。」
「夜月さん!?」
夜月さんは私の近くに来ると「ごめんね。」そう言った。
「何で謝るんですか？私は夜月さんにお礼を言いたいのに。」

聞きたいことがありすぎて頭の中が混乱する。その姿を見て夜月さんが話し出した。
「私ね、日本人と外国人のハーフでさ、目がこんな色だからいじめられてたの。今では何やってんだろって思うけど気がついたら泉の中に入ってて。でも許せなかった。いじめた子達も、自分を殺した私も。次に目が覚めたとき目の前にいたのは藍ちゃんで、なぜか私はクラスのいじめを知っていた。もう私のような人をつくりたくなかった。だから藍ちゃんを利用した。で、今こうなった。だいたいこんな感じ。自分が消えそうなことに気づいたから藍ちゃんにお礼を言って消えようとしたんだけど、なかなか消えなくって。藍ちゃん見てたら私のこと知っちゃうし説明だけでもしようと出てきた。まきこんでごめん。」
目の前でおきていることが信じられない。
「でも、私は嬉しかった。夜月さんのおかげでたくさんのものが手に入った。謝らないでほしい。ありがとう。」
そう伝えると夜月さんは嬉しそうに笑う。
「私も、藍ちゃんと出会えて良かった。」
そう言って夜月さんは空へ消えていった。

三年後、私は大好きなあの公園へ行った。風が吹く。1人の少女が立っていた。
「何か、困ってる?」
手をさしだす彼女の目は青かった。
「何で…?」
驚きと嬉しさで私はかたまる。
「意外と消えきれないものなんだね。ただいま、藍ちゃん。」